

実 践 編

目 次

- 事例Ⅰ 「話し言葉が伝達手段として機能していないN. T児の指導」
(中学部2年 男子) 13
- 事例Ⅱ 「話し言葉は持っているが、周囲の人とうまく気持ちを伝え合うことが
できず、集団の中では見通しを持ったり、意欲的に活動したりするこ
とが難しいK. Y児の指導」(高等部2年 男子) 25
- 事例Ⅲ 「伝え合う方法を理解できず、情緒的に不安定になってしまうA. N児
の指導」(小学部2年 女子) 36

【事例Ⅰ】 話し言葉が伝達手段として機能していないN. T児の指導

1 対象児の概要（初期アセスメント結果より）

(1) 対象児 N. T (男) 中学部2年 CA 14歳6か月 (H10. 1月現在)

(2) 家族構成 祖父, 祖母, 母, 本人

(3) 生育歴

- ・ 妊娠中 出産時 帝王切開, 満期産
- ・ 乳幼児期 離乳 3か月 一人歩き 10か月
首の座り 3か月 始語 1歳6か月
座り 5か月

(4) 教育歴

- ・ K県児童総合相談センター (3～6歳)
- ・ H学園 (通所施設) (4～6歳)
- ・ K幼稚園 (3～4歳)
- ・ S幼稚園 (4～6歳)
- ・ 本校小学部 (H1. 4月入学)

(5) 諸検査結果

- ・ 辰見ビネー知能検査 MA 3:5 IQ 25 (平成9年5月実施)
- ・ S-M社会生活能力検査 SA 4:5 SQ 32 (平成9年5月実施)

身辺自立	移動	作業	意志交換	集団参加	自己統制
5:5	3:9	5:10	3:4	3:1	5:0

- ・ NAUDS～名大式自閉症発達尺度 (実践資料1) (平成9年5月実施)

言語では、エコラリア等の病理現象もかなり見られるが、意思伝達に言語を用いることも少しある。感情の理解が困難であるために、他者との関係も一時的であり、連続性が見られない。

- ・ PEP-R (実践資料1) (平成9年5月実施)

物の名前はよく分かるが、抽象的な概念を表す言葉については理解が困難である。また、言語での指示に対して、身振りによる簡単な指示に対する理解は高い。弁別能力や視覚的記憶は比較的高い。感覚異常がかなり見られ、外部刺激に対して過敏である。

(6) コミュニケーション

ア 言語

- ・ 身近な物の名前は分かることが多いが、抽象的な概念を表す言葉や「どちら」などの代名詞の意味が分からないため、話し言葉での働き掛けには混乱してしまうことが多い。
- ・ 他の人の名前を呼ばれても返事をしたり、日ごろ接することの多い友達や教師の名前

が分からなかったりする。

- ・ 授業の発表場面では、自分が何か言わないといけないことは分かっているが、何を言ったらいいのかわからず、「しせいよー」「しこうほうせいよー」等いろいろなことを矢継ぎ早に言うなど、混乱してしまうことが多い。
- ・ 一度に二つの指示を出すと、最初の指示の方だけにこたえようとする人が多い。
- ・ 話し言葉は要求や次の活動の確認が中心であり、「汗をふいてくださいよ」「ホックを留めてくださいよ」等、習慣になっていることについては、助詞を含めた三語文で伝えるが、ほとんどの要求は一語文である。(実践資料2)
- ・ 動作をしている絵を見せて何をしているところか尋ねると「ボール」などと名詞だけで答えようとする。
- ・ 話し言葉は多いがエコラリアや独り言がほとんどである。

イ 社会性

- ・ 特定の友達には触れたり、手を引っ張ったりすることがある。
- ・ 友達や教師の働き掛けに対して過敏に反応し、相手の行動を気にして次の行動がとれなかったり、大声を出すなど不安定になってしまったりすることがある。
- ・ 休み時間はボールや自転車一人で遊ぶことが多いが、教師が誘えば、一緒にバドミントンやボールなどで、やりとりをしながら遊ぶことができる。
- ・ 知らない異性であっても、髪のおいをかいたり、握手を求めたりすることがある。
- ・ 状況の意味が分からないとき(順番を待たされているときなど)や話し言葉での指示が分からないとき、特定の友達が近づいてきたときに不安定になり、大声を出したり、シクシク泣き出したりすることがある。

ウ 認知

- ・ 文字は読めないが、連絡帳の名前と机の名前をマッチングさせて配ることができる。
- ・ ミキサーやキーボードを数回扱うことで、操作を覚えることができる。
- ・ 行事について聞かれ、関連することを答える。(「附養まつり」と言われて「ワッショイ、ワッショイ」とおみこしを担ぐまねをする。)

(7) 家庭での過ごし方(実践資料3, 実践資料4)

- ・ 母親が仕事で留守中は何もしていないことが多い。
- ・ 家庭内での自由時間は花の水掛けをしたり、母親と宿題をしたりして過ごすことが多い。
- ・ 朝の一連の活動は大体見通しを持っているようだが、ところどころ母親の言葉掛けが必要である。
- ・ 週末は「近くの公園まで散歩→バス乗車→ファーストフード店で食事」と大体決まったコースに母親と出掛けるようにしている。また、スイミングや体操教室に定期的に通っている。

(8) 課題

- ・ 限られた要求以外に話し言葉を伝達手段として適切に用いて、相手に自分の気持ちを伝えることが少ない。
- ・ 二語文以上や抽象的な概念を用いた指示については、意味を理解しにくく、相手の意図と異なる行動でこたえてしまったり、混乱して不安定になってしまったりすることがある。

- ・ 状況や場面の意味が理解しにくく、次に何をすればいいか分からずにウロウロしたり独り言を言ったりして不安定になることが多い。
- ・ 相手の行動を気にしているが、自分から相手にかかわろうとすることは少ない。

2 児童生徒、保護者の考える将来の生活及び要望（H8，9年度

「子供や保護者の意見を聞く会」より）

(1) 児童生徒、保護者の考える将来の生活

- ・ 作業所に通所させたい。
(一日の流れがある程度決まっているところで生活させたい。)
- ・ 現在祖父宅に同居しており、卒業後もそのつもりでいるが、親亡き後のことを考えると心配である。

(2) 児童生徒、保護者の要望

ア コミュニケーションに関する要望

- ・ 簡単な受け答えができるようになってほしい。
- ・ 自分のしたいことや気持ちを伝えられるようになってほしい。

イ その他

- ・ 一人でバス通学ができるようになってほしい。

3 指導方針

「子供や保護者の意見を聞く会」から、保護者は卒業後も本児を家庭で過ごさせたいと考えていることが分かった。また、家庭を拠点にして、本児に合った活動が可能な作業所へ通所したり、余暇のために外出したりして、いろいろな人とかかわり、多様な経験をしてほしいと願っている。このようなことから、保護者が考える本児の将来の生活は、家庭に生活の基盤を置くことから、家庭の中でただ受け身的に生活するのではなく、見通しを持って自分で考え、行動できるとともに、家族の一員として何らかの役割を持てるようになっていく必要があると思われる。また、進路先や外出先で現在以上に本児がかかわっていく相手は広がっていくことから、いろいろな場面で相手と受け答えをしたり、自分の気持ちが伝えられるようになっていくことが大切であるとする。わたしたちは、この二点について保護者と共通理解をすることができた。

保護者の考える将来の生活像や、「子供や保護者の意見を聞く会」において保護者と話し合ったことを踏まえ、次のような考え方を基に指導を進めていくことにした。

家庭や学校で次に行う活動の見通しを持って、自分から行動できるようにする。

本児は、場面や状況の意味を理解することが難しいために、今、何をすればいいのかということを理解するのが苦手であり、何をしてもなくうろろうろしたり、感覚的な行為にふけていたりすることも多い。そこで、本児が自分から行動できるようにするためには、場面や状況の意味を理解させることで、今、何をすればいいのかという見通しを持たせることができるのではない

かと考えた。そうすることで、いろいろな活動に自分から落ち着いて取り組めるようになり、周囲の人とも安心してかかわることができるようになり、相手の伝えたいことを理解することができるようになると思う。

具体的には次のような考え方で指導をしていく。

- 本児の生活基盤である家庭と学校において、スケジュールや活動場所を知らせる。
 - ・ 本児が意味を理解しやすい活動を表す絵カードを提示することで「今、何をすればいいのか」ということを明確に分からせる。
 - ・ 初めは「次は○○」というように言葉を添えて絵カードと言葉の意味を一致させていく。次に、保護者や担任の言葉掛けがなくても絵カードを見て確認し、自分から活動場所に移動したり、一連の活動に取り組めたりできるようにしていく。
- 家庭において役割を持つということから、手伝いを設定する。
 - ・ 保護者の希望や本児の興味・関心から、皿洗いの手伝いを設定する。
 - ・ 手順を決めたり、活動の仕方が分かりやすいように用具の置き方を工夫したりすることで、できるだけ主体的に活動できるようにしていく。
 - ・ 活動が終わったら、保護者に「終わりました。」と報告できるようにする。

自分の欲しい物やしたいことを、絵カードと話し言葉でいろいろな人に伝えることができるようにする。

本児なりに相手と意思伝達をしようとする意欲は持っているものの、話し言葉が伝達手段として十分機能していないということから、まず、本児にとって伝えやすい「伝達手段の獲得」を目指していきたいと考えた。そこで、視覚優位であり、視覚的な記憶も良好であるという本児の実態から、視覚的な手掛かりである絵カードを活用し、本児から相手に自分の気持ちを伝えられるようにする。その際、話し言葉を添えることで、絵カードを手掛かりにして、話し言葉の意味付けができるようになり、話し言葉を適切に用いることにつながっていくものと考えた。また、絵カードによって意思伝達が容易になることで、家族や教師等身近な人だけでなく、いろいろな場面でいろいろな相手と伝え合うことができるようになると思われる。さらに、相手に自分の気持ちを伝えることで、自分のしたかった活動ができたり、欲しかった物が手に入ったりするという経験を通して、「相手ともっと伝え合いたい」という意欲を高めることができると思う。

具体的には次のような考え方で指導していく。

- 今後、生活場を広げたり、余暇活動を充実させたりするために、日ごろあまり接していない相手との意思伝達場面を設定していく。
 - ・ 現在でも保護者と定期的に利用しているファーストフード店において、自分の好きなメニューを注文できるようにする。
 - ・ お金の写真にマッチングさせて必要な金額を準備できるようにする。
 - ・ メニューやサイズ、数量、ここで食べるということが書かれた注文カードを店員に提示し、「これをください。」とすることができるようにする。
- 休み時間に本児が担任を誘って、本児が好きな活動と一緒にを行うようにする。
 - ・ 本児が好きな活動であるバドミントンをやる。
 - ・ 絵カードに「バドミントンしよう。」という話し言葉を添えて、担任が本児を誘うようにし、相手を誘うときの伝え方を理解できるようにする。
 - ・ 自分で絵カードを担任の所まで持って来て、「バドミントンしよう。」とすることができるようにする。

興味・関心のある活動を、担任や友達等身近な人と一緒にやることを通して、人とかかわる楽しさを味わうことができるようにする。

本児は限られた要求以外、ほとんど自分から教師や友達にかかわりを求める様子は見られない。これは、周囲の人のかかわりに対して過敏に反応してしまったり、他者の言動が気になってしまったりすることが多く、自分からかかわろうとするまでに至っていないからではないかと考える。しかし、本児は教師が誘えば、ボールのやりとりやバドミントンをすることもあり、人とかかわる楽しさも芽生えつつある。そこで、本児が好きな活動を身近な人と一緒にやることを通して人とかかわる楽しさを十分に味わわせ、他者を「安心できる存在」「楽しい存在」として意識し、伝え合いたいという気持ちを高めていくようにしたい。

具体的には次のような考え方で指導していく。

- 休み時間に、本児にとって身近な存在である担任が、本児の好きな活動と一緒にやるようにする。
 - ・ 二人以上で行う活動であるバドミントンをやる。
 - ・ 本児の活動したいという欲求を十分満たすようにする。
 - ・ 本児が打ちやすいようにシャトルを返したり、担任の方に返すように促したりして、相手を意識しながら活動するようにする。

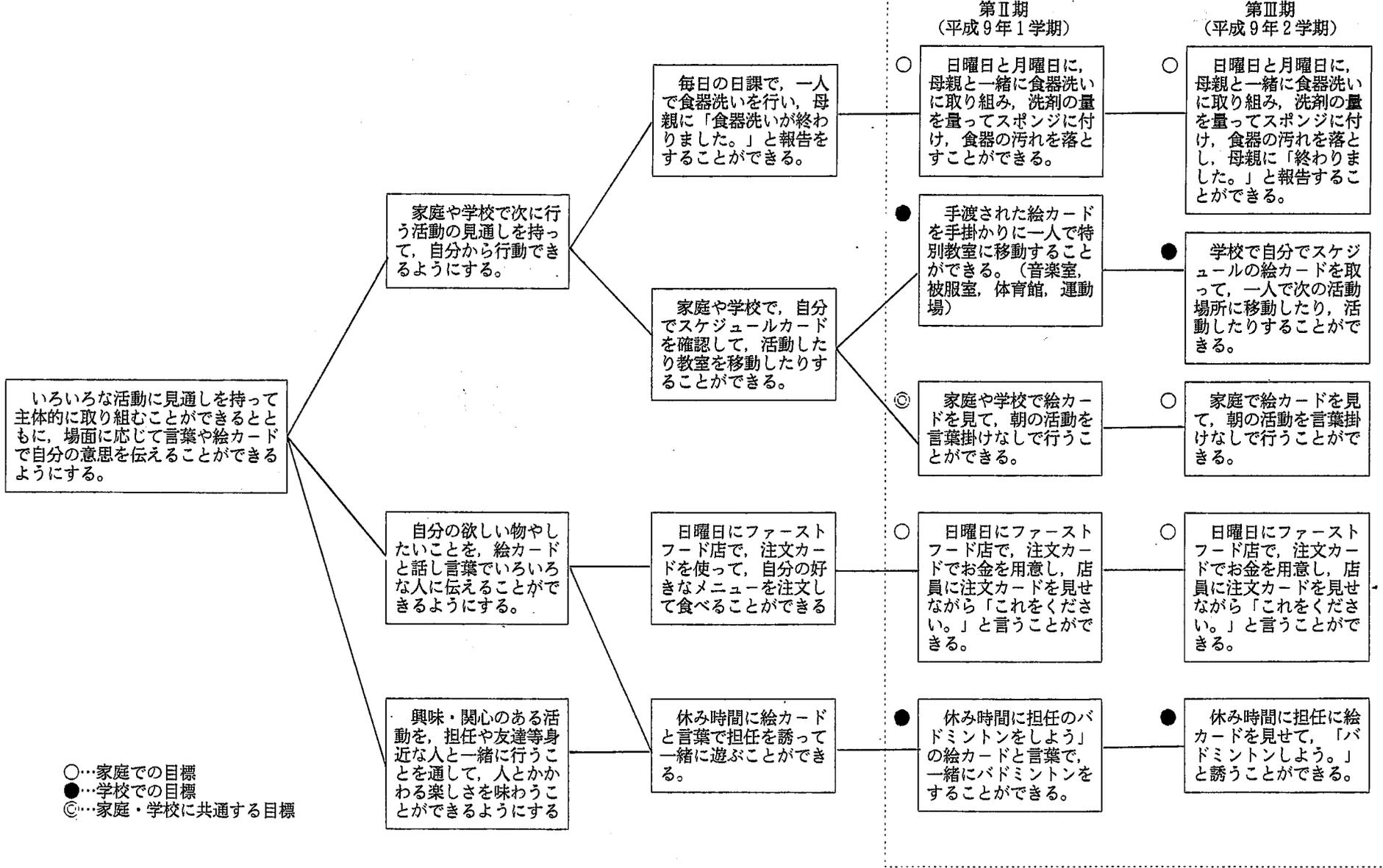
4 指導目標 (平成9年度1学期～2学期)

学校卒業目標

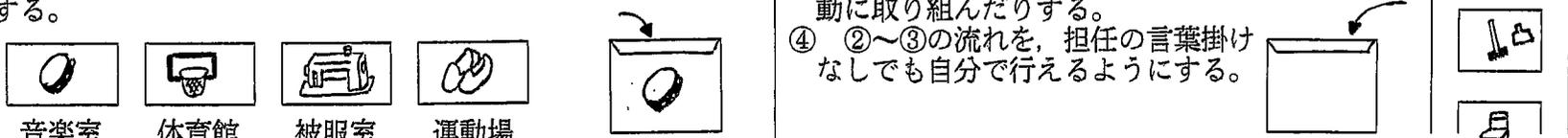
学部卒業目標

学年修了目標

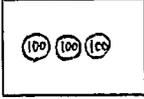
学期目標



5 指導内容及び指導結果①

学年目標		家庭や学校で自分でスケジュールカードを取って、活動したり、教室を移動したりすることができる。	
学期目標	第Ⅱ期 (平成9年1学期)	第Ⅲ期 (平成9年2学期)	
	手渡された絵カードを手掛かりに、一人で特別教室に移動することができる。(音楽室, 被服室, 体育館, 運動場)		学校で、自分でスケジュールの絵カードを取って、次の活動場所に移動したり、活動に取り組んだりすることができる。
指導内容	<p>① 授業の前に教師が特別教室を表す絵カードを見せて、「次は○」と言う。</p> <p>② 特別教室の入口に、同じ絵カードをはった袋を用意し、持ってきた絵カードをその中に入れるようにする。</p> <p>③ 授業が終わったら、袋の中の絵カードを持って教室に戻るようにする。</p>	<p>① 「次は何?」と尋ね、本児にスケジュールボードを見るように促す。</p> <p>② スケジュールの絵カードを上から1枚取って下の袋に入れる。</p> <p>③ 絵カードが示す次の活動場所に移動したり、活動に取り組んだりする。</p> <p>④ ②～③の流れを、担任の言葉掛けなしでも自分で行えるようにする。</p>	 <p>音楽室 体育館 被服室 運動場</p>
	指導経過	<p>①については、絵カードを示されれば、自分から「○○」と言うようになり、絵カードと言葉の意味の一致が図られたようである。</p> <p>②については、最初の2, 3回は教師と一緒にいったが、後は自分で袋に入れるようになり、絵カードを手掛かりに一人で教室を移動できるようになった。</p> <p>③については、最初の2, 3回は教師の言葉掛けが必要だったが後はほとんど忘れることなく絵カードを教室に持って帰り、自分のスケジュールボードに返していた。</p>	<p>①については、スケジュールボードの一番上のカードを見て「○○よ。」と活動内容を答えた。絵カードと活動内容の一致はすぐに来たようである。</p> <p>②については、スケジュールの絵カードを上から1枚取って、下の袋に入れるという流れはすぐに理解することができた。</p> <p>③については、②から③の一連の流れを理解し、カードを取って袋に入れたら次の活動へと、教師の言葉掛けがなくても自分から行動できるようになった。</p>
評価	A		A
考察	<p>活動場所を象徴する絵カードを用いたことで、一人でも教室を移動できるようになった。これは、絵カードによって活動場所が理解できたこと、絵カードを持って教室を移動したことで、移動中も活動場所を確認することができたからだと考える。さらに、本児にとって絵カードを、同じ絵カードをはった袋に入れるという手順は分かりやすく、目的的な行動につながったと考える。</p>		<p>活動を象徴する絵カードを用いたことで活動内容ははっきり理解することができたようである。また、スケジュールボードにカードをしまう袋を設置したことで、次は何をすればいいのかが明示され本児も戸惑うことなく活動できたのではないかと考える。スケジュールや活動内容の変更にも混乱することなく、スムーズに取り組めることが多くなった。これは、毎日スケジュールに沿って生活したことで、変更があってもどこが変わったかということが理解できたからではないかと考える。</p>

指導内容及び指導結果②

学年目標	日曜日にファーストフード店で、注文カードを使って、自分の好きなメニューを注文して食べることができる。	
学期目標	第Ⅱ期 (平成9年1学期)	第Ⅲ期 (平成9年2学期)
指導内容	<p>日曜日にファーストフード店で、注文カードでお金を準備し、注文カードを指さしながら「これをください」と言うことができる。</p> <p>① 財布からお金を取り出し、注文カードのお金の写真にマッチングさせて必要な金額を用意する。 ② カウンターに行き、注文カードを指さして母親と一緒に「これをください。」と言う。 ③ ①②が定着してきたら、一人で①②の一連の行動を行えるようにする。</p> <p>注文カード(表)  (裏) </p>	<p>日曜日にファーストフード店で、注文カードでお金を準備し、注文カードを指さしながら「これをください」と言うことができる。</p> <p>① 財布からお金を取り出し、注文カードのお金の写真にマッチングさせて必要な金額を用意する。 ② カウンターに行き、注文カードを指さして母親と一緒に「これをください。」と言う。 ③ ①②が定着してきたら、一人で①②の一連の行動を行えるようにする。</p>
指導経過	<p>①については、学校での取り組みでは指示がなくても、自分で財布からお金を取り出しマッチングさせて用意していたが、家庭での取り組みでは、②の方に重点を置かれたようでお金は母親が準備したようである。 ②については、母親と一緒に絵カードを指さしながら「これをください。」と言えたということである。</p>	<p>①については、カウンターでお金をマッチングさせ、必要な金額を店員に渡すことができた。 ②については、注文カードを示して自分で「これをくださいよ」と言うようになった。 ③については、本児も手順を理解しつつあり、ほぼできるようになってきている。</p>
評価	C	B
考察	<p>以前から定期的に利用していたファーストフード店であり、必要な額のお金の写真や、注文に必要な事柄が書かれた注文カードを担当が準備したことで、母親もすぐに取り組むことができたと考えられる。しかし、初めは店の人に注文カードの意図が伝わらず、母親を困惑させてしまった。このような取り組みについては、事前に店の人の理解を得ておくことが必要だったと反省される。注文カードは母親と相談しながらメニューを絞る等の変更をしていった。母親は「つい言葉掛けが多くなる。」と述べており、学校での取り組みの様子についても知らせていくことが必要であった。</p>	<p>カードを用いたことで、必要な事柄を十分伝えて、買い物ができるようになったと考える。Ⅱ期の評価を母親と一緒にに行ったことで今期はできるだけ一人で注文できるようにするという共通理解することができた。以前はカウンターで待っている間、不安定になることもあったが、注文の仕方に慣れ、見通しが持てるようになったことで、落ち着いて待つことができるようになった。母親から財布をどこに携帯させるか、お金はどこで準備させるか等質問があり、学校で取り組んだ際の手順や援助の仕方等を書いたメモを渡すことにした。家庭での取り組みについては、特に細かく課題分析し事前に共通理解しておくことが大切であったと考える。</p>

指導内容及び指導結果③

学年目標	休み時間に絵カードと言葉で担任を誘って、一緒に遊ぶことができる。	
学期目標	第Ⅱ期 (平成9年1学期)	第Ⅲ期 (平成9年2学期)
	休み時間に担任の「バドミントンしよう。」の絵カードと言葉と一緒にバドミントンをする事ができる。	休み時間に担任に絵カードを見せて、「バドミントンしよう」と誘うことができる。
指導内容	<p>① 休み時間になったら、担任がバドミントンのラケットをかいた絵を見せ、「バドミントンしよう。」と言う。</p> <p>② 一緒に体育館に行き、バドミントンをする。</p> <p>③ 一人でシャトルを天井にバウンドさせて楽しむことがあるのでそれが何回か続いたら「こっちだよ。」と促し、担任に羽根を返すように促す。</p>	<p>① 本児の机にバドミントンの絵カードを置いておく。</p> <p>② 休み時間に担任に絵カードを差し出させ、担任が「バドミントンしよう。」と言い、本児にも「バドミントンしよう。」と言うように促す。</p> <p>③ 本児が絵カードを差し出し、「バドミントンしよう。」と言ったら、一緒に体育館に行き、バドミントンをする。</p>
指導経過	<p>①については示された絵カードを指さし「バドミントンよ。」と言うようになり、絵カードが意味するものはすぐに理解できた。</p> <p>②については、バドミントンの絵カードを見て、一人でも体育館に行くようになった。道具がある場所が分かり、自分で倉庫からラケットとシャトルを持ってくるようになった。</p> <p>③については、「こっちだよ。」の言葉掛けで教師に羽根を返すことができた。担任と打ち合いながら笑顔が見られ、時間一杯活動を楽しむ様子が見られた。</p>	<p>①については、バドミントンの活動を示している絵カードであることを理解し、「バドミントンよ。」と言っていた。</p> <p>②については、担任の言葉を模倣して「バドミントンしよう。」と言うことができた。</p> <p>③スケジュールボードから自分でバドミントンの絵カードを探し出し、担任の所まで持ってくるようになった。その際、担任に絵カードをしっかりと見せようという意識はあまりないが、指でトントンとたたきながら、「バドミントンよ。」と言うようになった。自分から「バドミントンしよう。」とは言えなかった。</p>
評価	A	B
考察	担任の誘いにもスムーズに応じて、活動自体を楽しむ様子が見られた。これは、本児が好きな活動で、今までにも教師と遊んだ経験があるバドミントンを取り上げたことによるものと思われる。自分からバドミントンの絵カードを持ってきて、「バドミントンよ。」と担任に言うこともあったが、担任から働き掛けられて、バドミントンをしたときの伝え方を理解しつつあるのではないかと考える。	自分から担任に「バドミントンよ。」と伝えてくるようになったがこれは絵カードと活動内容が一致しており、本児が伝えたい内容を理解できたからであると考えられる。また、休み時間という場面での指導であり、文脈を理解することができたのではないかと考える。絵カードを持ってくるのは特定の担任に限らず、教育実習生であることもあり、本児は特定の人と遊びたいというよりも、活動を一緒に行ってくれる大人を求めていると思われる。

6 考察とまとめ

(1) 考察

ここでは、指導方針に沿って、本児の変容と明らかになったことについて述べていくことにする。

家庭や学校で次に行う活動の見通しを持って、自分から行動できるようにする。

時系列的な生活の流れについては、自分で活動内容を表した絵カードを操作し、スムーズに次の活動に移行できるようになった。これは本児が理解しやすい絵カードを用いたことで、活動の内容がはっきりと理解できたからであると考え。また、特別教室への移動については、絵カードを活動場所の同じ絵が書いてある袋にマッチングさせて入れるという活動が、本児にとって理解しやすかったと考える。絵カードを提示する際には、初めは、「(次は)〇〇」と言葉を添えるようにしたが、自分でカードを見て「〇〇よ。」と言って確認する等、絵カードと言葉が一致するようになってきた。さらに、スケジュールや活動内容の変更があっても、不安定になったり混乱したりせずに落ち着いて活動に取り組めるようになってきた。これは、変更があっても、スケジュールがあることで活動を予測できることや、毎日の日課が確立されているためにどこが変更になったかを理解することができるからではないかと考える。家庭での手伝いについては、母親と定期的に行い、大体の手順を理解して取り組めるようになった。毎回、用具の置き場所や手順を変えずに行ったことで、本児も見通しを持って取り組めたようである。



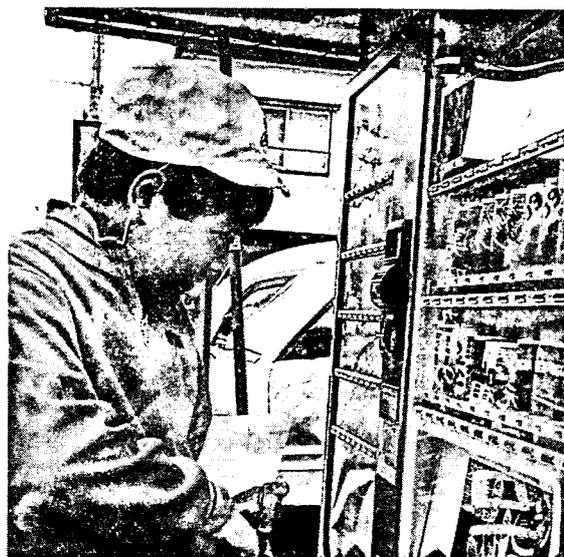
自分の欲しい物やしたいことを、言葉と絵カードでいろいろな人に伝えることができるようにする。

ファーストフードの注文の場面では、注文カードを使う際、店側の戸惑いもあり、事前に話をして理解を求めていくことが必要であった。また、保護者は大変協力的であったが、一方で「つい言葉掛けが多くなってしまった。」と述べている。学校でもファーストフード店での注文の取り組みは行ったが、その際の細かい手順や教師の援助の仕方についても保護者に十分説明し、学校と家庭が一致した取り組みをしていくことが大切であった。注文カードについては、保護者と相談しながら、メニューを絞ったり、注文に必要な事柄を書き加えたりした。保

護者から取り組みの様子を聞いて、注文カードの内容も子供や店員の対応に応じて変更していくことも必要であると思われる。休み時間については、絵カードを提示して担任が「バドミントンしよう。」と誘うようにしていたが、自分から絵カードを持ってきて「バドミントンよ。」と言うようになった。これは、絵カードによって活動内容がはっきりと分かったことと、休み時間という日常生活場面において指導がなされたことで、「休み時間にバドミントンをするときは相手にこう伝えるんだ。」という伝える方法を本児が理解できたからであると考えられる。

興味・関心のある活動を、担任や友達等身近な人と一緒に行うことを通して、人とかかわる楽しさを味わうことができるようにする。

休み時間になると、担任の所へ絵カードを持って来て「バドミントンよ。」と言い、時間一杯活動を楽しむ様子が見られた。また、相手が打ちやすいようにシャトルを返したり、ラリーが続くと笑顔が見られるようになってきた。これは、バドミントンが本児にとって、もともと興味・関心の高い活動であったことが大きいと思われる。ところで、大人であれば担任以外にも要求することがあったが、本児にとっては、特定の人と遊びたいというよりも活動を一緒にしてくれる人を求めているという部分が大きいようである。しかし、ほとんど自分から他者にかかわろうとしない本児に対しては、まず活動自体と一緒に十分楽しむことで相手への意識を高めていく必要があると考える。



(2) ま と め

本児の取り組みについて、明らかになったことをまとめると以下ようになる。

意思伝達の基礎となる力について

- ・ 絵カードを伝達手段として用いたことで、相手の伝えたいことがより分かるようになり落ち着いて相手に対応したり、活動に取り組んだりするようになった。また、話し言葉の意味が理解できるようになり、よく使う言葉であれば、話し言葉を適切に用いて相手に伝えようとするが増えてきた。
- ・ 保護者や教師が、日常生活や授業において、視覚的な分かりやすさという観点から、わかり方や教材・教具、場の設定の工夫をしたことで、落ち着いて活動に取り組んだり、簡単な質問に適切に答えたりすることが増えてきた。

意思伝達の場面や対象を広げることについて

- ・ 本児が伝えるには多いと思われる情報量であっても、絵カードを提示することで相手に自分の意思を伝えることができるようになった。
- ・ 保護者が余暇活動に関心を持ち、学級の友達とボウリングに行くなど、積極的に余暇活動に取り組むようになってきた。

7 今後の課題

- ・ 現在有している伝達方法を、他の場面においても般化できるようにする。
- ・ 担任や友達と一緒に楽しめる活動を増やす。
- ・ 本児や保護者のニーズに応じて伝え合う場面を選定し、広げていくようにする。
- ・ バス通学や手伝い等、一人でできる活動を増やす。

【事例Ⅱ】 話し言葉は持っているが、周囲の人とうまく意思を伝え合うことができず、集団の中では、見通しを持ったり、意欲的に活動したりすることが難しいK. Y児の指導について

1 対象児の概要（初期アセスメントの結果より）

(1) 対象児 K. Y (男) 高等部2年 CA 17歳3か月 (H10, 1月現在)

(2) 家族構成 父, 母, 本人, 弟 (中1年), 妹 (4歳)

(3) 生育歴

- ・ 胎生期 異常なし
- ・ 周産期 吸引分娩 生下時体重3,545g
- ・ 乳・幼児期 首のすわり 4カ月 始 歩 1 歳
お 座 り 1 歳 始 語 3 歳
は う 8 月 人見知り ふつう

(4) 教育歴

- ・ S幼稚園 3～5歳
- ・ H幼稚園 5～6歳
- ・ 精神衛生センター 就学前 週1回 (自閉児対象の療育)
- ・ K大臨床心理研究室 就学前 月1回 (プレイセラピー)
- ・ A子供療育センター 就学前 (知的障害児対象の療育)
- ・ 市立T小特殊学級 7～12歳
- ・ 市立N小 (T学級) 週2回 (情緒障害児対象の通級指導)
- ・ 本校中学部 13歳～

(5) 諸検査結果

- ・ 辰見ビネー知能検査 IQ38 (MA6:4) (平成9年7月実施)
- ・ S-M社会生活能力検査 SQ43 (SA6:6) (平成7年11月実施)

身辺自立	移 動	作 業	意志交換	集団参加	自己統制
8 : 6	10 : 2	8 : 0	6 : 2	3 : 7	5 : 8

- ・ 物の名前程度はよく理解しているが、それらが文章の中で出てくると何を意味しているのか理解できないところがある。
- ・ 移動, 身辺処理等大まかな生活の流れには見通しを持って自分で行動できる。また話し言葉は持っているが、集団参加のためには有効に用いられていない。

- ・ NAUDS～名大式自閉児発達尺度 (平成8年8月実施) (実践資料5)
話し言葉はあるが、伝達機能として十分に機能していない。感情レベルでの固さが見られ、またパター的な行動へのこだわりが見られる。大人と一緒に行動はとれるが、子供(仲間)との関係には未熟な面がある。

(6) コミュニケーションについて

ア 言 語… (実践資料6)

- ・ 決まった場面でのあいさつや日常生活で習慣化した簡単な応答はできる。
- ・ 自分が気になる行事に関連したことを確認をしたり、日常習慣に関する程度のことは「〇〇してもいい？」と承認を求めたりする。また親しい人には要求もときどきしてくる。
- ・ パターン化した話題に応じてくれる特定の人には時や場所を考えず、積極的に話し掛けてくる。付き合いの少ない大人や友人にはかかわろうとしない。
- ・ 「ぼくは〇〇をしたいそうです。」とか「〇〇先生にお代わりしてもいいですか。」などのように、自分と相手との関係の中で、うまく文章を組み立てることができず、ときどき助詞や文末の表現を間違えることがある。

イ 社会性

- ・ 学校では特に好む大人や友達はいない。また、休み時間も一人で過ごすことが多く、人とのかかわりは少ない。
- ・ 集団の活動では、言葉掛けがないと自分から発表したり、具体的行動に移ったりすることはあまりない。教師が話す間も、意味が分からないのかぼんやりしている。
- ・ 一人で定期バスを利用して登下校したり、市民文化ホールT団地等に出掛けたりすることができる。時々車内やバス停で周囲を全く気にせず、独り言をつぶやくことがある。

ウ 認 知

- ・ 数字は百～千桁ぐらいまでは読め、時計も理解しており、時計を見ながら自分で行動できる。
- ・ 学校の一日の時間割、週時程表程度は理解しており、自分から行動できる。しかし、授業になると、見通しが持てず言葉掛けがあるまでぼんやりしていることが多い。
- ・ 日付に関し、1～3年前後の行事の日、曜日は正しく記憶している。来月の学校行事でも、プリントの活字を一通りさっと見ると大体覚えられる。
- ・ バス停や駅名、特定のストアのチェーン店名、いくつかのバス路線の時刻などの記憶については大変優れている。
- ・ カレンダーの記憶は得意であるが、「火曜日の前の日は？」といった言葉による質問には答えることが難しい。
- ・ 具体物があれば「これがいい。」と選択することはできるが、「〇〇と□□は、どちらが楽しかったですか？」といった問い掛けになるとあまり答えられない。

(7) 家庭での過ごし方 (実践資料7, 8)

- ・ 洗濯物畳みや草花への水掛け等の手伝いは、気持ちが安定しているときは自分からする。
- ・ 夏休みには毎年家族旅行に出掛けているが、ふだんは近所のストアを除いて、出掛けることはあまりない。
- ・ 余暇の過ごし方としては、学童保育に行くことや、テレビゲーム、紙工作をすることは一人でできる。休日に母親とお菓子作りをするのも好きである。

(8) 課 題

- ・ ある程度の話し言葉を持っているが、自分から話し掛けようとする気持ちが少ない。
- ・ 言葉の理解が不十分なために、見通しを持てず自分から進んで活動できない。
- ・ 生活場面で、意思を伝え合う人が少なく、また地域の人とのかかわりは希薄である。
- ・ 社会的なマナーを守って行動するのが難しいことがある。

2 児童生徒、保護者の考える将来の生活及び要望(H 8, 9年度「保護者の意見を聞く会」より)

(1) 児童生徒、保護者の考える将来の生活

- ・ 数年後は福祉施設への入所を考えている。できれば、家族のきずなを強く持つために卒業後は数年、自宅からどこかに通所(通勤)させたいと思う。しかし、本児の家庭内でのこだわりがひどくなるようであれば、入所もやむを得ないかもしれない。
- ・ 現在は母親とのかかわりを中心に生活しているが、家族全員とうまくかかわれるようになれば、家庭の雰囲気もさらによくなるのではないか。
- ・ 本児が進んでする手伝いは長所なので、無理強いしない範囲で今後も継続させたい。
- ・ 仕事をして疲れて帰ってくるだろうから、家庭ではゆっくりくつろがせたい。独り言やバスへのこだわりなどの行動もある程度までは認めてあげたい。

(2) 児童生徒、保護者の要望

ア コミュニケーションに関する要望

- ・ 家族全員と会話の機会を持ち、互いをもっと分かり合えるようになってほしい。
- ・ 外から電話をして何かを報告したり、留守番をしているときは簡単な電話の応対をしたりできるようにしてほしい。
- ・ 同じことばかり話し掛けてくるが、もう少し違う話題で話したり、一度答えたら納得できたりするようになってほしい。
- ・ ストアなどに外出したときに独り言を言い続けたり、鏡に向かってしゃべり続けたりする癖は治らないものか。

イ その他に関する要望

- ・ 妹がぐずると、そばで気持ちを高ぶらせてしまい手を出してしまうことがあるが、やめさせる手だてはないものか。
- ・ ここ数年バスへのこだわりが強くなっており、食事中に何度も立ち上がったたり、用事を頼んでも「バスが来てから」と言って受け入れなかったりする。また定刻にバスが来ないと大声を上げたり、泣き叫んだりするので、家族全員がイライラしている。解決策はないだろうか。

3 指導方針

本児の将来的なライフスタイルについての保護者との話し合いをまとめてみると、卒業後の進路については数年間は自宅から通所(通勤)し、その後に、福祉施設に入所する方向で考えている。

職場の生活に関しては、本児に適した環境(適性に応じた仕事内容や理解してくれる人の存在の下)で過ごすことができれば、見通しを持ち、進んで仕事に取り組むことは可能であると思われる。人間関係でも、職場の仲間に自分の好きな話題で話し掛けたり、休みに一緒に余暇活動を楽しんだりすることができれば、楽しく職場へ通勤することができるのではないかと考える。

次に家庭生活では、洗濯物の取り入れ、草花の水掛け等の手伝いは現在程度で自分の役割を果たしてくれればよい。また休日は、のんびり横になったり、自分の好きな余暇を楽しんだり、たまには母親とお菓子作りをしたりして過ごせればと思っている。そういったことをベースに現在よりももう少し家族全員とかかわれるようになり、現在の友人とのかかわりもどこかで続けたりして、人とかかわりがもう少し広がってくれたらと願っている。

このような生活を実現していくために、本児のアセスメント結果や保護者との話し合いを踏まえ以下のような考えで指導していくことにした。

主体的に生活するために、集団の中で見通しを持てるようにする。

本児は、一日の生活の流れは分かっているが、まだ一つ一つの活動になると見通しが持てないところがある。特に集団での活動になると、話し言葉の理解が十分でないために、何をすればいいのかわからなかったり、別なことに気持ちが向いていたりするために、本来の活動に取り組めないでいる。そこで一つ一つの活動について分かりやすい説明を受けて、自分のすることが分かったら、集団の中でも進んで活動に取り組めるのではないか。また、家庭生活では自由時間をうまく過ごせないために、バスの定時通過を確認することにこだわるようになったり、独り言が目立ったりしているようだ。家庭での生活スケジュールを充実させて、時系列的な時間の流れに見通しが持てるようになれば、気持ちも安定し、問題となっている行動も改善されていくのではないか。

このようなことを通して、本児は卒業後進んで仕事に取り組んだり、家庭内でも気持ちを安定させて、楽しく家族と話したり、余暇を楽しんだりすることができるのではないかと考える。

具体的には、次のような考え方で指導していく。

- 作業学習の中で「一つの活動」に対して見通しを持たせる。
 - ・ 年間を通して、本児の作業能力や理解力に合った活動に取り組めるようにする。
 - ・ 一つの活動を分かりやすく提示するために、本児が認知面で得意とする数字や絵、文字カードを用いる。
 - ・ 説明をよく聞こうとする気持ちを育てるため、仕事に慣れてきたら目標や仕事内容を変えていき、それに対応できる力を育てる。
- 家庭における生活スケジュールの確立により、生活に見通しを持たせる。
 - ・ バスの「定時通過チェック」へのこだわりに対して、バスを見てもいい時間帯と、別なことをする時間帯を、はっきり区別させていく。
 - ・ いくつかの手伝いや余暇活動を具体的に提示して、活動のレパトリーを増やす。
 - ・ 主体性が発揮できるよう、自分で選択した休日のスケジュール作りを進める。

いろいろな生活場面で、意思を伝え合える人を増やすようにする。

本児はかかわり手として、家庭ではほとんど母親だけ、学校では担任だけという限られた人間関係の中で生活している。現在はそれでこと足りているのかもしれないが、卒業後、生活のスタイルが変わったとき、必要な場面で意思を伝え合う相手の不在が心配される。

そこで、本児が家庭や地域、学校などいろいろな生活場面で、具体的な活動を通して相手に分かるように要求したり、情報を得て判断、行動できたりするような機会を多く設定していきたい。互いに理解し合える相手が増えれば、将来の生活に向けて、いろいろな場面で主体的に活動できることが多くなるのではないかと考える。

具体的には、次のような考え方で指導していく。

- 父親との間で伝え合う関係を深める。
 - ・ 父親に、自分の経験したことを分かりやすく伝えるために日記を読むようにする。
 - ・ 父親と一緒にドライブや余暇活動などを行い、共有できる活動・話題を増やす。
- 電話の利用に慣れる。
 - ・ 簡単なやりとりができるようにかかってきた電話に対応する練習を段階的にする。
 - ・ 外出先から自分の居場所や様子を電話で伝えられるようにする。
- 余暇活動や手伝い等、本児に分かりやすい目的的な活動を通して地域の人にかかわれるようにする。
 - ・ 慣れない人と話し言葉だけで伝え合うことは難しいので、なんらかの補助的手段を用いる。

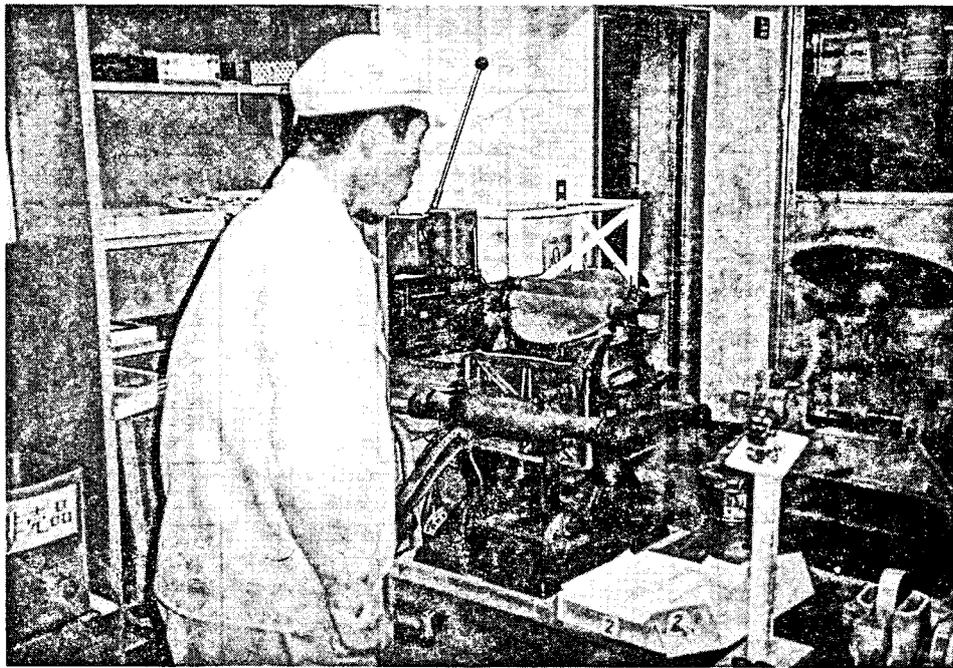
人とかかわれるような余暇活動を身に付けられるようにする。

本児は工作、テレビゲーム、バスの広告の撮影など自分なりに余暇を少し楽しめている。しかし、これらは本児の個性的な趣味であるため、他の人と話題が共有しにくいものが多い。卒業後の生活に向けて、自由な時間をいつも自分一人で過ごすのではなく、相手がいる、あるいはグループの中でも楽しめる余暇活動を持っていることが必要ではないか。

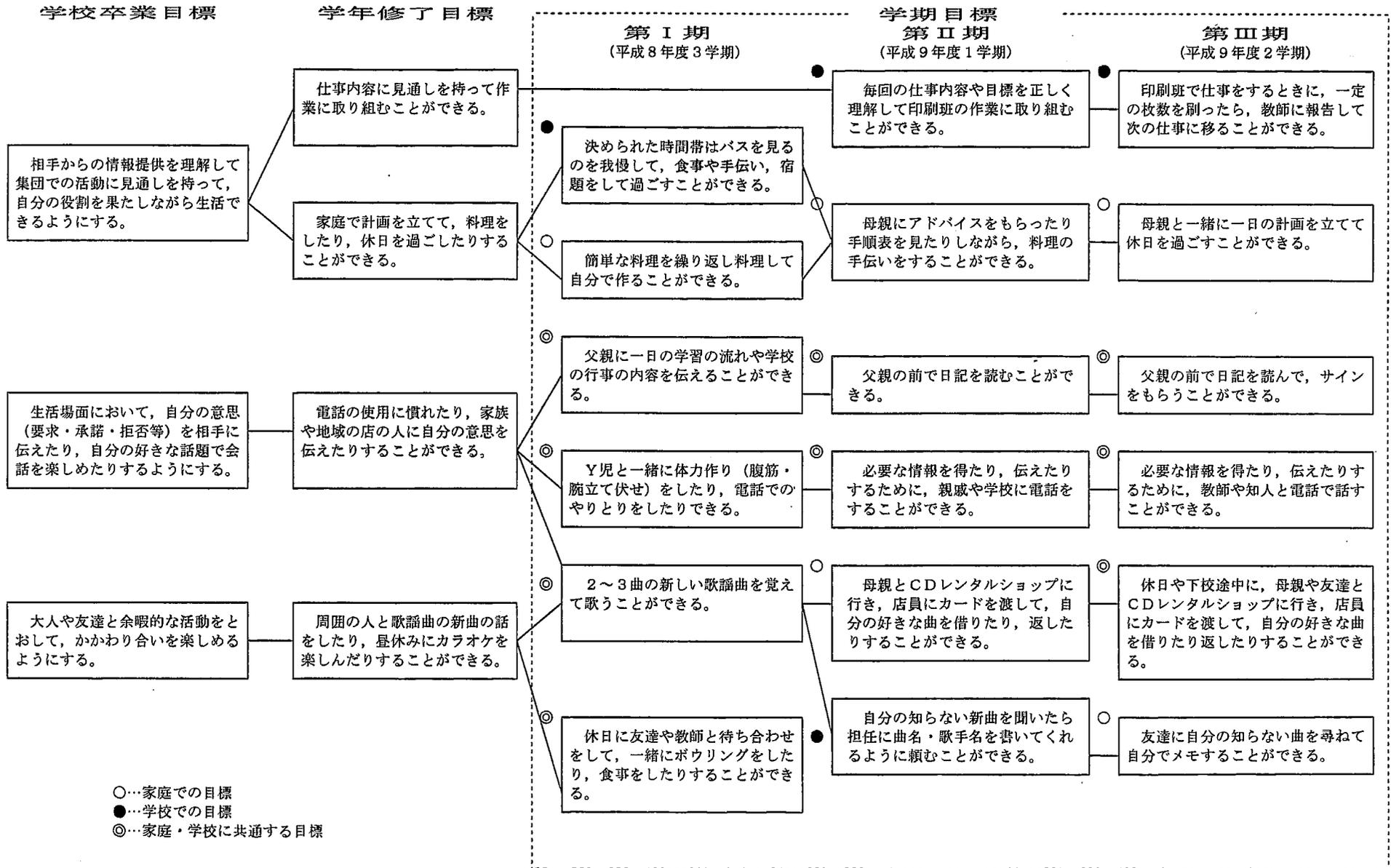
そこで、まず生活の母体となる家族と一緒に楽しめるような余暇を見つけてほしい。またクラスの友だちとも同じような余暇活動を経験することで、卒業後も自分で要求したり、誘われたりしてそれらの活動に楽しく主体的に参加できるようになるのではないか。また、そのような気持ちを基に卒業生の同窓会や職場での福利厚生的な行事にも積極的に出掛けて行こうとする生活習慣が育ってくるのではないかと考える。

具体的には、次のような考え方で指導していく。

- ボウリングやカラオケを家族や友人と楽しむ。
 - ・ 卒業後の生活を考え、生活年齢に合わせたり、実際に卒業生が友達同士でやっていたりする活動を取り上げて指導していく。
- 本児が関心を持っている友人とのかかわりを深める。
 - ・ 具体的な活動を通して自然に触れ合える機会を多く持たせる。
 - ・ 家庭生活（休日・長期休業中など）の中でのかかわりを持てるようにする。



4 指導目標 (平成8年度3学期～平成9年度2学期)



- …家庭での目標
- …学校での目標
- ◎…家庭・学校に共通する目標

5 指導内容及び指導結果①

学年目標	家族や地域の店の人に自分の意思を伝えることができる。		
学期目標	第Ⅰ期（平成8年3学期）	第Ⅱ期（平成9年1学期）	第Ⅲ期（平成9年2学期）
	2～3曲の新しい歌謡曲を覚えて歌うことができる。	母親とCDレンタルショップに行き、店員にカードを渡して、自分の好きな曲を借りたり、返したりすることができる。	休日や下校途中に、母親や友達とCDレンタルショップに行き、カードを渡して、自分の好きな曲を借りたり、返したりすることができる。
指導内容	<ul style="list-style-type: none"> ○ クラスで決めている今月の歌を歌詞カードを見て歌う。 ○ 昼休みにカセットテープを聴いたり、音楽室でカラオケをしたりする。 ○ 家庭で自分の好きなCDを借り、母親と一緒にレンタルショップに出掛ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ① 自分の気に入った曲を、学校で担任にメモしてもらおう。 ② 母親と一緒にレンタルショップに出掛け自分で店員にカードを渡してCDを借りる。 ③ 一人でバスに乗って返しに行く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分の気に入った曲を、自分でメモする。 ○ 録音したテープを担任と一緒に聴く。 ○ 休日や下校途中に、レンタルショップに行ってCDを借りる。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 下校時は担任や友だちと一緒に行く。 ・ 休日は母親と一緒に行く。返す際は一人で行く。
指導経過	<p>【学校での取り組みの結果】 クラスの歌は一番だけだが、よく覚えて歌えるようになり、それを昼休みにカラオケで喜んで歌うようになった。 知らない曲を聴くと、担任や近くにいる人に曲名を尋ねるようになった。</p> <p>【家庭での取り組みの結果】 母親と一緒に2回、レンタルショップに出掛けた。 返すのは母親が行った。</p>	<p>【学校での取り組みの結果】 2年生になり、高等部の各教室に流れる曲名をよく尋ねるようになり、その都度教師に頼んでメモしてもらっていた。 (週に1～3回ぐらい)</p> <p>【家庭での取り組みの結果】 3回ほど、母親と一緒に出掛け、店員にメモを渡して好きな曲を借りることができた。また自分でダビングしていた。 2回は自分で返しに行けた。</p>	<p>【学校での取り組みの結果】 高等部の各教室から流れてくる新曲をほぼ毎日のようにさかんに尋ねてくるようになった。自分でメモもとれていた。 下校時に学校近くのレンタルショップに出掛けたが、バスの時刻が気になりやや落ち着かなかった。</p> <p>【家庭での取り組みの結果】 3回ほど出掛けた。だいたい一人でできるが、少し不安定な面もみられた。</p>
評	B	A	B
考察	<p>将来の余暇活動に向けて始めた取り組みだが、予想以上に歌謡曲に興味を示し、知らない曲を自分から尋ねるようになったことは大きな変容であると考えられる。 また、レンタルショップの利用は母親と一緒に出掛け、大体母親が行ったようなので、今後は可能な部分は本児が、自分でできるよう手だてを考えていきたい。</p>	<p>レンタルショップでは、メモを渡すこと、自分の要求を伝える、借りることができるようになった。今期も3回ほど経験したので、本児には、「このメモを渡せば、自分の好きなCDを借りれるんだ。」ということが、よく分かってきて、メモを書くことにも、意欲を示すようになってきた。店内ではまだ落ち着きがないので、母親は一人で行くことには、ためらいがある。</p>	<p>Ⅲ期までの経験をとおして、本児はレンタルショップの利用にはだいぶ慣れてきた。店内で偶然好きなCDを見つけて「これも借りていいの？」と店員に聞くぐらい、店にも慣れてきた。 幸い店の方には、毎回暖かく対応してもらっているのでもう少し経験を積めば、一人で利用することも可能かと感じられるようになってきた。今後も継続したい。</p>

指導内容及び指導結果②

学年目標	家庭で計画を立てて、母親の手伝いをしたり、休日を過ごしたりすることができる。		
学期目標	第Ⅰ期（平成8年3学期） 決められた時間帯はバスを見るのを我慢して、食事や手伝い、宿題などをして過ごすことができる。	第Ⅱ期（平成9年1学期） 母親にアドバイスをもらったり、手順表を見たりしながら、料理の手伝いをすることができる。	第Ⅲ期（平成9年2学期） 家族と計画を立てて、休日を過ごすことができる。
指導内容	① 見てもいい「バスの時刻表」を作る。 ア 自宅前を通るバスの時刻を本児と担任で確認する。 イ 家庭の生活の流れを確認し、我慢できるバスの時刻を決める。 ウ 「見てもいいバスの時刻表」を作る。 ② 家庭で時刻表に沿って過ごす。 ・ ○×チェック表をつける。	○ 「料理の日」を決めて手伝いをする。 ア 料理の日を決める。 イ 献立を決める。 ウ 母親に聞きながら料理を作る。 エ 手順表を見ながら料理を作る。 ○ 時々、自主的に料理の手伝いをする。	① 休日の活動項目を挙げて、カードを作る。 ② 前日に母親と話し合っ、休日の計画を立てる。 ③ 計画に沿って、一日を過ごす。 ④ 時々、「一日の出来事」を電話で担任に報告して話をする。
指導経過	【学校での取り組みの結果】 バスの時刻は、一日をとおしてほとんど覚えていたので、それを基に話し合い、手伝いや食事の時間ははずして「見てもいいバスの時刻表」を作成し、自宅に持ち帰った。 【家庭での取り組みの結果】 時刻表があることで、逆に安定して過ごせるようになり、食事や手伝いの時間に自分から母親に話し掛けてくるようになった。	【学校での取り組みの結果】 母親に文献を渡したり、取り組みについてアドバイスをしたりした。 【家庭での取り組みの結果】 休日に事前に計画して、母親と一緒にお菓子作りを楽しむことができた。 バスにこだわらなくなったので、自分から台所にやってきて、手伝いをしたり、話をしたりするようになった。しかし、計画的に料理をするまでには至らなかった。	【家庭での取り組みの結果】 母親との情報の交換により、本児が家庭で落ち着いて過ごしており、自分なりに考えたスケジュールで休日を過ごさせていることが分かった。 そこで、指導内容で予定していたカードを利用してのスケジュール作りは実施せず、それぞれの活動が充実するよう、適宜支援していくような方法に変えた。 本児は、バスの写真撮影、アイロンかけなど、Ⅰ～Ⅲ期を通して身に付けた活動が定着してきたようだ。
評	A	C	A
考察	バスを我慢させることで、イライラするのではなく予想したが、全面的に禁止するのではなく、本児が「見てもいい時間」を自分で選択したことが、驚くほどスムーズに行動できるようになった原因と思われる。	本児が見通しを持って、料理に取り組めるような手だてを、母親に具体的に提示できなかったことが、あいまいな取り組みになってしまった原因と考える。しかし、母親は進んで料理を手伝ってくれるようになった本児の変容に十分満足しているようである。	バスへのこだわりの克服により、休日に気分が不安定になることが少なくなり、手だてがなくても、自分で大まかな計画を立てて過ごさせていた。 今後も、各活動が充実したり、新しい余暇活動が身につけられるよう支援していきたい。

6 考察とまとめ

ここでは、第Ⅰ期からⅢ期までの本児と周囲の人々とのかかわりの変容について、本児の指導方針の項目に沿って検証する。

(1) 考 察

主体的に生活するために、集団の中で見通しが持てるようにする。

まず、家庭で「バスの定時通過」へのこだわりがなくなり、生活する態度が安定したことはここ数年の大きな課題が克服され、本児や家族にとって大きな出来事だった。その後は、自分から台所に入ってきて、夕食準備の手伝いをしたり、話し掛けたりするようになり、そして、現在それらの夕刻の手伝い等は、「決まった時間の決まった仕事内容」として、自分で見通しを持って取り組んでいる。K. Y児にとって、家族とかかわりを深めるためには、バスの定時通過だけにこだわるのではなく、「手伝い→バスを見る→食事」といった時系列的な見通しを持って行動することを身に付ける方が、気持ちが安定するので、有効であったと考える。またバスの件では、一つの問題行動をやめさせようと何回も注意するより、ある枠の中で自分で選択させることで見通しを持たせ、こだわりを改善させていくという方法もあることを確認できた。

次に、「一つの活動に見通しを持つ。」指導については、継続的に指導が可能な作業学習の印刷班の場で取り組み、二～三つの仕事でも最初の説明だけで、絵カードを見ながら自分で確認し、行えるようになった。集団の中で作業場所、目標、時間、内容を本児に分かりやすく提示していくために、本児の得意とする数字の記憶や文字カードを活用したのは有効であったと考える。

いろいろな生活場面で、意思を伝え合える人を増やす。

まず、生活地図（実践資料8）から、ここ一年で、本児の生活範囲は大きく広がったことが分かる。写真撮影、カラオケ等の余暇活動を通じたものが多く、本児自身が「次は〇月〇日に行くよ」と自分で計画を立てて楽しみにするまでになっている。これらは将来の生活に向けても良い方向に進んでいるととらえていいのではないだろうか。CDレンタルショップでの「メモ」の利用は、店員への「分かりやすさ」のためには大変役立ったと考える。また、自宅周辺、学校周辺という二つの地域でCDレンタルショップの利用を進め、一つの「できる活動」を他の場面や対象へと増やすことができたと考える。

友達とかかわりとしては、第Ⅰ期に友達との体力作りや電話でのやり取りという具体的な活動を通してのかかわりを考え、実際その友達が本児宅を訪問することもあった。しかし、お互いに「また遊びたい。」「もっと話したい。」「また来てほしい。」といった「伝え合う関係」を深めるまで至らず、高等部とはいえ、子供だけのかかわり合いの難しさを感じさせられた。やはり仲介役としての大人のかかわり方の工夫が必要であると感じた。

父親とかかわりについては、日記を読むことで自分のしたことを「分かりやすく伝えられる。」ようになり、最近かかわりもまた深まりつつある。この取り組みは現在も継続されており、日常の家庭生活での意思の伝え合いの促進につながればと考える。

このように、K. Y児は周囲の人とかかわるために「話し言葉」だけでなく、なんらかの「補助的手段」を活用すれば、周囲の人に自分から要求や経験したことを伝えることができた。そして、自信を持ち始めたK. Y児は、最近母親に「一人でJRのカレンダーを買いにN駅に行きたい。」「K町の本屋に行きたい。」と要求するようになり、実際に休日を利用して家族と一緒にバスを利用して練習を始めている。今後も本児の場面や対象が広がり、生活が楽しくなるよう家庭と連携して指導を継続していきたい。

人とかかわれるような余暇活動を身に付ける。

カラオケは最近、本児の大好きな活動として定着している。以前は、集団の中ではぼんやりしていることが多かった本児が、カラオケの場面では、最近「ぼくは〇〇が歌いたい。」と先陣を切って、自分の覚えた新曲をはっきり主張できるようになった。これは、単にカラオケが好きということだけでなく、友達や教師にいろいろな曲名を尋ねてCDレンタルショップで借りたという経験が、カラオケという活動やその曲への思い入れを強めているのではないかと考える。また、本児は家庭でも「カラオケがしたい。」と主張するようになり、母親も「あまりこんなことは言わなかったのに。」と本児の変容を喜び、家族で取り組むようになってきている。

また回数としては少ないが、クラスの子供や保護者と一緒にボウリングやカラオケボックスに出掛ける機会も持てた。やはり、これらの余暇活動は、卒業後は子供たちだけでは、なかなか実現しにくいので、在学中から家族や保護者とともに進めていくべきと考える。

(2) ま と め

意思伝達の基礎となる力について

- ・ 分かりやすく説明してもらうこと（分かりやすさ）で、見通しを持って行動、生活できるようになり、気持ちが安定し、周囲の人にも自分からかかわろうとすることが多くなった。また、以前はぼんやりしていることが多かった集団活動の場面で、「ぼくは〇〇がしたい。」と主張ができるようになった。
- ・ 父親への「日記」、CDレンタルショップでの「メモ」は、相手への「伝わりやすさ」に大きな効果があるとともに、本児自身の「かかわりやすさ」も含んでいたように感じる。自分の気持ちを話し言葉だけではうまく伝えられない本児にとっては、練習しても実際場面でのトラブルは不可避に近いが、あらかじめ書いた（書いてもらった）メモを渡すという手続きを主にした方が地域との触れ合う機会を増やしていけるだろう。

意思伝達の場面や対象を広げることについて

- ・ 今回の取り組みを通して、いくつかの生活場面でかかわる相手は増えた。そして、それらの機会は、現在の生活においても、本児が自分で計画して設定するようになりつつある。
- ・ かかわる相手については、まだ検討の余地がある。CDレンタルショップ、カラオケボックスのような場所は、実際にかかわる相手はその都度変わってしまう。幸い、店の方にはそ

の都度温かい配慮をしてもらい、本児は思いを満たすことができた。しかし、時間で交代していく相手に必ずしも適切な対応を求めることができず、難しい一面も感じた。実際にK・Y児が経験したことだが、借りたいCDが全部貸し出し中のとき、財布を忘れてしまったとき、客が混んでいて自分の順番になかなかならないなど予想しづらい事態になったときは、気持ちは動揺するだろう。わたしたちは、できる限りそういったアクシデントは避けたいし、それに対しては、あらかじめ配慮しておくことを大切にしたい。しかしながら、同時に経験を重ねていくことで、子供自身の持つ意思伝達の力を伸ばしていくことも必要ではないかと考える。

- ・ 今回の取り組みを通して、地域でかかわったどの相手も大変協力的だった。かかかわる相手や周囲の人が、少しの心配りや協力を惜しまなければ、生活の中でのかかかわる相手は今後増やしていくことができるだろうし、それが主体的な生活を支援していくことにつながると思われる。

7 今後の課題

- ・ 本児の「分かりやすさ」の取り組みを、他の授業や生活場面でも生かせるようにする。
- ・ 休日のスケジュール作りの取り組みを継続していく。
- ・ 地域の店の利用の継続や新しい場面、相手についての検討を進める。
- ・ 家庭内で本児が話題を共有できるような活動を継続していく。
- ・ 卒業後を考えた、休日におけるクラス等の子供・保護者との余暇活動の取り組みを継続する。



【事例Ⅲ】 伝え合う方法を理解できず、情緒的に不安定になってしまうA. N児の指導について

1 対象児の概要（初期アセスメントの結果より）

(1) 対象児 A. N (女) 小学部2年 CA 8歳2か月 (H10. 1月現在)

(2) 家族構成 両親, 兄 (小4), 本人

(3) 生育歴

- ・ 妊娠中, 出産時 生下時体重 3,100g
- ・ 乳幼児期 離乳 1歳9か月 一人歩き 11か月
首の座り 3か月 始語 3歳0か月
座り 6か月

(4) 教育歴

- ・ K市保健所 S教室 (2歳0か月～3歳7か月)
- ・ K県児童総合相談センター (3歳9か月～4歳1か月)
- ・ H学園 (4歳1か月～6歳6か月)
- ・ K県総合教育センター (5歳6か月～6歳6か月)

(5) 諸検査結果

- ・ 辰見ビネー知能検査 IQ : 44 (MA 2 : 8) (H 7. 11月実施)
- ・ S-M社会生活能力検査 SQ : 48 (SA 2 : 11) (H 7. 11月実施)

身辺自立	移動	作業	意志交換	集団参加	自己統制
5 : 5	2 : 11	2 : 9	1 : 8	1 : 2	2 : 9

- ・ NAUDS～名大式自閉児発達尺度 (平成8年10月実施) (実践資料9)

身辺処理についてはほぼ自立しているが、言語・対人関係や感情・共感性に関するの落ち込みが見られる。言語については一語文を持っているが、他者への意思伝達としては使われていない。行動については、自発性はあるものの、統制が十分に取れているとは言えず、感情も非連続的である。そして、これらのために他者との関係（特に子供同士の関係）が持たず、集団活動が低いことが分かる。

(6) コミュニケーションについて (実践資料10)

ア 言語

- ・ 「この人だれ？」の質問には答えられない。しかし、両親, 兄, 本人, 祖父母に関しては、「〇〇は？」と尋ねると、その人を指さしながら「〇〇」と言うことができる。
- ・ あいさつや始業・終業時の号令掛けなどを言うように何度も促すと、エコラリアで応じ

る。

- ・ 給食などの場面で自分の欲しい物があるとき、「ちょうだい。」と言うように指示すると早口で「ちょうだい。ちょうだい。ちょうだい。」と繰り返して言う。
- ・ 取ってほしい物があるときには、母親に向かって手招きをしながら「おんで（おいで）」と、身振りと話し言葉で要求を伝えることがある。
- ・ 日常生活で使う範囲については理解言語も多く、買い物の際には母親の「〇〇を買おう」に応じてかごの中に品物を入れることができる。
- ・ ふだんの学校生活の流れに沿っていれば、身振りや指さしを伴った話し言葉での指示を理解し、行動に移すことができるが、いつもの流れと違うと指示を理解できず、行動が滞ってしまうことがある。
- ・ チューブブランコで遊びたいときには、側にいる大人（教師）ならだれにでも、クレーン行動で手を引っ張り、固定してあるチューブブランコのひもをほどくように要求する。

イ 社会性

- ・ 自分の意図やこれまでの行動パターンと違うことを強要されるとかんしゃくを起こし、どこにでも寝転がって泣き、情緒不安定になる。
- ・ 呼んでも視線を合わそうとはしないものの、繰り返し呼ばれると「はい」と弱々しく返事をする。
- ・ 抱き抱えられるなど他者から体に触れられるのは体をよじって嫌がる。しかし、情緒不安定で泣いていたりと、とても機嫌がよかったりする場合には、自分から大人（不特定の教師）に抱き付くことがある。
- ・ 授業など集団の中に入るとぼんやりと一点を見つめていることが多いが、興味・関心のあるものであれば集中して見ていたり、席を離れてその物を取りに自分から出てきたりすることがある。ただし、同じ活動が長く続いたり、関心度が低くなったりすると、姿勢が崩れたり、離席したりする。
- ・ 遊びは、集団から離れてのチューブブランコや三輪車乗りなどの一人遊びがほとんどであるが、自転車に乗せて欲しいときは自分から寄ってきて一緒に乗せてもらうこともある。

ウ 認知

- ・ 絵本など志向性の高いものはよく注視し、注視時間も持続するが、関心の低いものはすぐに視線が移ってしまう。
- ・ 日めくりカレンダーの数字を見て同じ数字のカードを取るというマッチングができる。
- ・ 絵本の中のもの指さすなどの直接的な指さしはできる。離れているものへの指さしはしない。
- ・ 注意を喚起すると、模倣することはできる。
- ・ これまで経験したことや慣れていることへの見通す力はある。（お風呂のVTRを見るとさっさと道具を持って銭湯に行くなど。）
- ・ 物を直接手渡すことはできないが、外の人が持っている箱に入れることはできる。

(7) 家庭での過ごし方（実践資料11, 実践資料12）

- ・ 母親とのかかわりが主である。
- ・ 見たくないテレビ番組があるとリモコンを母親に渡してチャンネルを変えさせたり、祖母宅から自宅に早く帰りたいと母親のバッグを持ってスカートを引っ張ったりと、直接的な行為で自分の要求を伝えようとする。

(8) 課 題

- ・ 自分の意図と違ったり、行動を制限されたりすると、自分の気持ちや意図をどのように伝えればいいのか分からずに、泣いたり寝転んだりする。
- ・ クレーン行動や物を使って示すなど直接的な行為で（母親に対しては話し言葉もある）意思伝達はするものの、それは本児からの一方的な要求だけであり、伝えてくる場面や伝えたい内容が極めて限られている。
- ・ 日常生活の流れに沿っていけば見通しを持って行動はできるが、ふだんと異なる流れや予定変更などの変化への適応が難しく、情緒不安定になってしまう。
- ・ 興味・関心が限定されていて一人遊びが多く、集団の中に入ってもぼんやりと過ごすなど対人意識が薄い。
- ・ 家庭では、「おはようございます。」「いただきます。」などのあいさつができていますが、学校では教師からあいさつしても応答がない。

2 児童生徒、保護者の考える将来の生活及び要望（H 8, 9年度

「子供や保護者の意見を聞く会」より）

(1) 児童生徒、保護者の考える将来の生活

- ・ 将来は家で一緒に暮らしながら、施設などで働かせたい。施設については、本児に合う場所を探していきたい。
- ・ 働くためにも今は基本的なこと（生活習慣、あいさつ、公共施設の利用の仕方、人に迷惑を掛けないなど）を身に付けてほしい。

(2) 児童生徒、保護者の要望

ア コミュニケーションに関する要望

- ・ 相手からの話し掛けに答えたり、自分の気持ちを言えたりできるようになってほしい。
- ・ 基本的なあいさつ（「おはようございます。」「さようなら。」など）ができるようになってほしい。
- ・ 友達や先生と一緒に楽しく遊んだり、かかわったりしてほしい。友達とのかかわりを増やしてほしい。
- ・ 見通しを持って行動できるようになってほしい。

イ その他の要望

- ・ 本児にとって将来の生きがいになるようなものを見付けられたらと思う。

3 指導方針

本児の将来の生活についての保護者との話し合いをまとめてみると、卒業後の進路については本児がまだ7歳ということもあり具体的には考えていないということだったが、何らかの形で職に就かせたいと考えている。また、自分の気持ちや要求を周りの人に伝えて精神的にも安定した生活を送れるようになることを望んでいる。

これらの保護者が考える将来の生活像を踏まえると、今後本児がかかわっていく相手は広がっていくと思われることから、まず、自分の気持ちを相手に伝えられるようになってほしいと考える。

次に、日常生活では、いろいろなことがめまぐるしく変化していくことから、次に行うことの見通しを持って自分で考え、行動できるようになることは大切なことであると考え。

そして、地域や職場での円滑な人間関係を築くためにも相手からの話し掛けに答えるなど、相手とのやり取りができるようになることが大切であると考え。

また、友達や教師と一緒に楽しく遊んだり、かかわったりしてほしいという願いや、将来の職場での円滑な人間関係の基礎となる日常のあいさつについても今のうちから身に付けてほしいという願いを持っているので、その点も指導方針に生かしたいと考える。



自分の気持ちを写真カードや言葉などで相手に伝えられるようにする。

本児は、自分の気持ちや要求をうまく相手に伝えられなかったり、相手の言っていることが理解できないのに行動上の制限や変更を受けるために情緒不安定になり、泣いたり、寝転んだりすることがある。

ただし、本児は自分の取って欲しいものがあるとき他人の手を引っ張る（クレーン行動）様子が見られたり、欲しいものがあるときに「ちょうだい。ちょうだい。ちょうだい。」と言いながら取りに行ったりするなど、要求場面では自分の気持ちを本児なりの方法で表すことがある。しかし、それは、本児特有のものであり、他者へ伝わりやすいものではない。

そこで、本児が気持ちを伝えようとする多くの要求場面に注目し、どのようにして要求すればいいのかよく分からない本児に対して、自分の要求を伝える方法を教えたいと考える。そのために、視覚的な優位性を生かし、写真カードを使って要求を出せるようにしたいと考える。さらに、写真カードに「いいですか。」などの言葉を模倣で言わせ、添えさせる。この写真カードと話し言葉を併用していくことによって話し言葉に意味付けができるようになり、自分の要求や意図が相手に伝わることを理解させていき、話し言葉を適切に用いて相手に伝えることができるようになるのではないかと考える。

具体的には、次のような考え方で指導していく。

- 休み時間に自転車に乗りに行く場面で要求の出し方を理解させる。
 - ・ 自転車に乗りに行こうとするときに、何枚かの写真カードの中から自転車の写真カードを選ばせる。
 - ・ 選択した写真カードの活動をさせることによって、写真カードを見せた活動ができることを理解させる。
 - ・ 写真カードを見せるときに模倣で「いいですか。」と話し言葉を添えさせる。

写真カードや言葉などで次に行う活動の見通しを持って、自分から行動できるようにする。

本児は、これまで経験してきたこと、興味・関心のあること、毎日繰り返されていること（一日の生活の流れなど。）については、本児なりの見通しはある。しかし、登校後はまず、着替えを始めてしまい、「連絡帳を出す。」→「カバンをしまう。」→「着替える。」→「係活動をする。」という流れとは異なっていることがある。本児は、朝は機嫌が悪く、情緒的に不安定なことが多いため、なかなか行動しないことも多い。また、ふだんとは異なる流れや予定変更などの変化になかなか対応できず、情緒不安定になってしまうことがある。

本児は、具体物や写真カードなどの視覚的な手掛かりを提示すると「何をするのか。」理解しやすいようである。そこで、本児にとってなかなか見通しが持てず、滞ることが多い登校後において、写真カードを示すことによって「まず、連絡帳を出す。」という活動を理解させたいと考えた。

具体的には、次のような考え方で指導していく。

- 写真カードを見せることによって「今、何をするのか」という見通しを持たせる。
 - ・ 「連絡帳を出す場面」の写真カードを見せて連絡帳を出させる。
 - ・ 外の見通しが持てずにいる場面へも写真カードの使用を広げていく。

興味・関心のある遊びや活動を一緒にすることを通して、人とかかわる楽しさを味わうことができるようにする。

本児の授業中や休み時間の様子を見てみると、三輪車やチューブブランコでの一人遊びがほとんどで自分から友達にかかわろうとする様子は、ほとんど見られず、友達が近付いてきてかかわろうとしても避けようとする事さえある。

本児にとって自分の欲求や要求を受け入れて認めてくれる人は、母親である。本児は、わたし

たちが担任であることは分かっているが、まだ母親と同じような深い関係にまでは至っていない。そこで、まず担任とのかかわり合いを深めていく中で伝え合う相手への意識を持たせていきたい。

具体的には、次のような考え方で指導していく。

- 担任に誘われて本児の好きな遊びを一緒にすることによって相手を意識させる。
 - ・ 本児の好きな手遊び歌やじゃんけん遊びを一緒にする。
 - ・ 絵本を一緒に見ながら、絵本の中のものを指ささせたり、教師の動きを模倣させ、動作化させたりする。
 - ・ 遊びの内容としては、「担任の体のみを使っての活動」→「物を使った、あるいは物を媒介とした活動」→「やり取り遊び」へと発展させていく。

「おはようございます。」や「さようなら。」などのあいさつを教師と目が合ったら、自分から言うことができるようにする。

本児は、家庭では「おはようございます。」や「いただきます。」などのあいさつを行っている。ところが、学校では人からあいさつされても返事をしないことがほとんどである。構音上の障害はなく、言葉を模倣する力はあるにもかかわらず、なかなか言葉を言おうとしない。そこで、まず模倣でおじぎをすることから始める。そして、おじぎだけの模倣から徐々に「おはようございます。」などの言葉の模倣も促すようにしていく。これらの指導を毎日繰り返して行うことによって、あいさつができる場面を広げていきたいと考える。

具体的には、次のような考え方で指導していく。

- あいさつができる場面を広げる。
 - ・ 学校でもあいさつができるようにする。
 - ・ あいさつされたらおじぎをする習慣を付けさせる。
 - ・ おじぎをするときに「おはようございます。」などの言葉を模倣でさせる。

4 指導目標 (平成9年1学期～平成9年度2学期)

学校卒業目標

学部卒業目標

学年終了目標

学期目標

第Ⅱ期
(平成9年度1学期)

第Ⅲ期
(平成9年度2学期)

自分の気持ちを相手に自発的に伝えたり、相手からの話し掛けにこたえたりして、相手とのやり取りができるようにする。

自分の気持ち(主に、要求や欲求など)を写真カードや言葉などで相手に伝えられるようにする。

4枚の写真カードの中から自分の遊びたいものを選び、「いいですか。」などの言葉を添えて要求を伝えることができる。

● 自転車に乗って遊びたいときに写真カードを見せることができる。

● 自転車に乗って遊びたいときに写真カードを箱に入れて、「いいですか。」と模倣して言うことができる。

写真カードや言葉などで次に行う活動の見通しを持って、自分から行動することができるようにする。

写真カードや言葉による指示を手掛かりにして、登校後の「連絡帳を出す。」「カバンをしまう。」「着替える。」「係活動をする。」という一連の流れを理解して行動することができる。

● 登校後、写真カードを手掛かりにして連絡帳を出すことができる。

● 給食前の着替えの場面で写真カードを箱に入れ、それを手掛かりにして着替えることができる。

興味・関心のある遊びや活動と一緒にすることを通して人とかかわる楽しさを楽しむことができるようにする。

好きな遊びを教師と一緒にすることができる。

● 教師に誘われて一緒にじゃんけん遊びや手遊び歌をすることができる。

● 教師に誘われて一緒にじゃんけん遊びや手遊び歌をすることができる。

母親が指さしたものの名前を言いながら絵本を一緒に見ることができる。

○ 「あかちゃんのあそびえほんシリーズ」の絵本のページを母親にめくってもらいながら「こんにちは。」「はい。」「いい。」などのセリフを一緒に言うことができる。

○ 母親が言ったものを指さしながら絵本を見ることができる。

「おはようございます。」や「さようなら。」などのあいさつを教師と目が合ったら、自分から言うことができるようにする。

「おはようございます。」「さようなら。」などのあいさつの言葉を言われたときにおじぎをすることができる。

◎ 朝と帰りのあいさつの場面でおじぎの動作を模倣しておじぎをすることができる。

◎ 帰りのあいさつの場面でおじぎの動作を模倣しておじぎをすることができる。

- …家庭での目標
- …学校での目標
- ◎…家庭・学校に共通する目標

5 指導内容及び指導結果①

学年目標	4枚の写真カードの中から自分の遊びたい物を選び、「いいですか。」などの言葉を添えて要求を伝えることができる。	
学期目標	第Ⅱ期（平成9年1学期）	第Ⅲ期（平成9年2学期）
	○ 自転車に乗って遊びたいときに、写真カードを見せることができる。	○ 自転車に乗って遊びたいときに写真カードを箱に入れて、「いいですか。」と模倣して言うことができる。
指導内容	<p>① 休み時間に外に遊びに行く機会をとらえて数枚の写真カードを本児に見せる。</p> <p>② 数枚の写真カードの中から自分の遊びたいもの（自転車）の写真カードを選択させる。</p> <p>③ 選択したカードを教師に示して見せるようにさせる。</p> <p>④ 「じてんしゃ。」と模倣で言うようにモデルを示し、言わせてから自転車に乗せる。</p>	<p>① 帽子をかぶって外に遊びに行こうとするときに、その行動を一旦制限する。</p> <p>② 自転車の写真カードを本児に渡し、机の上に置いた箱に入れさせる。</p> <p>③ 「いいですか。」と模倣で言うように促し、言った後に自転車に乗せる。</p>
指導経過	<p>①については、写真カードを見せる前に本児がさっさと外に出て行ってしまふことがほとんどで、あまり取り組めなかった。</p> <p>②については、選択するという意味が理解されなかった上に、選択するということが自体が難しいために選ぶことができなかった。</p> <p>③④については、取り組み自体が少なかったために、ほとんどできなかった。</p>	<p>①については、担任間で共通理解したので取り組めることが多かった。</p> <p>②については、本児は、すぐに外に行きたいので嫌がることもあったが、写真カードを入れることはできるようになった。</p> <p>③については、本児が自転車に早く乗りたいという気持ちがあったためか、すぐに言えるようになった。</p> <p>ただし、本児が帽子を手取る（外に行くとき必ずする。）前に写真カードを入れさせると、時々自転車の写真カードを入れたにもかかわらず、自転車でなくチューブブランコで遊ぶことがあった。</p>
評価	D	C
考察	<p>本児がさっさと外に出ていってしまい取り組めなかった。これは、写真を見せなくても自分でさっさと外に行けるという状況にあったことと、自転車に乗るために写真カードを見せなければならないという必然性がなかったためであると考え。また、担任もお互いに手続きを確認し合っておらず、本児に写真カードを見せようという意識が低かったためでもあると考え。</p> <p>継続的かつ確実に写真カードを見せるという手続きを行わせることが、必要だと感じた。この手続きを繰り返すことによって要求の出し方を理解させられるのではないかと考える。</p>	<p>写真カードを箱に入れてから、自転車乗りに行くという行動は身に付きつつある。これは、本児にとって遊びに行くという場が、要求を出しやすかったからではないかと考える。</p> <p>今後は、自転車だけでなく、チューブブランコ遊びや絵本など外の遊びにも写真カードを使って要求を出させることによってこの要求の出し方の手続きを十分理解させ、情緒的な安定を図るとともに、いくつかの写真カードの中から自分のやりたい遊びを選択するという活動も行っていきたいと考える。</p>

指導内容及び指導結果②

学年目標	写真カードや言葉による指示を手掛かりにして，登校後の「連絡帳を出す。」「カバンをなおす。」「着替える。」「係活動をする。」という一連の流れを理解して行動することができる。	
学期目標	第Ⅱ期（平成9年1学期） ○ 登校後，写真カードを手掛かりにして連絡帳を出すことができる。	第Ⅲ期（平成9年2学期） ○ 給食前の着替えの場面で，写真カードを箱に入れ，それを手掛かりにして着替えることができる。
指導内容	① 登校したら，連絡帳を提出する場面の写真カードを見せ，「連絡帳。」と簡潔に言葉掛けして活動を促す。 ② できない場合は，連絡帳（具体物）を提示して活動を促す。	① 体育服から制服へ着替えようとする場面をとらえて本児に給食着を着ている場面の写真カードを渡し，机の上に置いた箱に入れさせて活動を促す。 ② 滞っているときは，「給食着に着替えようね。」と言いながら，写真カードを見せたり，制服や給食着（具体物）を提示し，活動を促す。 ③ 着替え終わったら箱ごと片付けさせる。
指導経過	朝は，機嫌が悪く取り組めないことが多かった。本児は，登校後まず着替えたいらしく，上着（シャツ）を脱ぐことが多かった。なお，写真を見て何度かそのとおりに行動することはできた。	写真を箱に入れてから着替えるという活動はできた。滞っているときは，写真カードよりも実物の方が有効なこともあった。 また，見通しの持てている活動だけに写真カードがなくても着替えられたこともあった。
評価	D	B
考察	写真カードを見せても行動できなかったのは，本児の情緒が不安定なために受け入れられなかったと考える。本児が，情緒的にも安定しているときに写真カードの使い方を教えてから，使う場面を広げていく方がいいのではないかと考える。	給食前の着替えは，本児にとって見通しのよく持てている活動だったので取り組むことができた。しかし，見通しの持てている活動だけに写真カードを使うという手続きが，理解されているのかという疑問もある。今後，写真カードの意味付けをしっかりと行うとともに，写真カードを使う活動を広げていくことが必要である。また，複数の写真カードを使い，これからすることの流れを理解させ，変化にも対応できる基盤をつくりたいと考える。

6 考察とまとめ

(1) 考察

ここでは、第Ⅱ期からⅢ期までの本児の成長や、変容について本児の指導方針の項目に沿って検証する。

自分の気持ちを写真カードや言葉などで相手に伝えられるようにする。

自転車の写真カードを箱に入れて「いいですか。」と模倣して言ってから自転車に乗りに行くという行動は、成功する回数も増え、身に付きつつある。また、回数的にはあまり多くないが、自転車とチューブブランコの2枚の写真カードからチューブブランコの写真カードを選んで箱に入れ、チューブブランコで遊んだこともあった。これは、あまり自分の気持ちを伝えようとしないう本児が、比較的自分の気持ちを伝えることが多い要求場面において指導を行ったことによって「自転車に乗りたいときは、自転車の写真カードを箱に入れればいいんだ。」ということが少しずつ理解されてきたからではないかと考える。

写真カードや言葉などで次に行う活動の見通しを持って、自分から行動することができるようにする。

本児は、朝の場面で滞ることが多かったので、写真カードでこれからすることを提示すれば、それを手掛かりにして行動を始めるのではないかと考えた。ところが、写真を見せても行動を始められないことがほとんどだった。また、滞っていないときでも写真カードで動き始めることは、なかなかできなかった。これは、今からすることが写真カードで示されているという手続きが本児に理解されていなかったからであると考え。また、本児が滞っているとき、つまり情緒的に不安定なときに写真カードを提示したので受け入れられなかったことが考えられる。

そこで、「今からすることは写真カードで示されていることである」ということを理解させることが大切だと考え、まず、一日の活動の中で本児が見通しを持ち、情緒的にも安定してと思われる場面で写真カードを使うことによって、写真カードの使い方(手続き)を理解させたいと考えた。このようにして指導した結果、写真カードを見て着替えるという行動は、身に付きつつある。ただし、本児が情緒的に不安定なときは、写真カードよりも制服などの実物の方が有効なことが多かった。これは、まだ写真カードの意味付けが十分ではないからであると考え。

興味・関心のある遊びや活動を一緒にすることを通して、人とかかわる楽しさを味わうことができる

本児から教師に対して遊びに誘うということは、ほとんどなかったが、「たまごのうた」や「きしゃぼっぽ」など本児が好きな手遊び歌をすると動作を模倣したり、歌を口ずさんだりする

こともあった。また、トイレでトイレットペーパーでふいてほしいときに手招きをしながら「おんで。おんで。（おいで。おいで）」と言ったこともあった。これは、本児の興味・関心のある遊びと一緒に繰り返し行ったことによって少しずつではあるが、対人意識が芽生えてきたからではないかと考える。

「おはようございます。」や「さようなら。」などのあいさつを教師と目が合ったら、自分から言うことができるようにする。

Ⅱ期では、朝のあいさつをしようとしても、本児の機嫌が悪く取り組めなかった。そこで、Ⅲ期では帰りの場面で取り組んだところ、模倣ではあるがおじぎをしたり、「さようなら。」と言ったりすることができるようになってきた。これは、朝よりも帰りの場面の方が本児が、情緒的に安定していることが多かったからであると考えられる。また、Ⅲ期では朝のあいさつもできるようになってきた。これは、登校時刻が早くなり、本児に心の余裕もできたためであると考えられる。

(2) ま と め

本児の取り組みについて、明らかになったことをまとめると以下ようになる。

意思伝達の力の基礎となるものについて

- ・ 自分の気持ちを伝えようとする意欲があると思われる要求場面で取り組んだことによって、写真カードを箱に入れて「じてんしゃ、いいですか。」と模倣であるが言えるようになってきた。
- ・ 本児にとって見通しが持てていると思われる給食前の更衣の場面で取り組んだが、まだ写真カードは行動のきっかけにしかなっていないように思われる。今後は、写真カードを使って見通しを持たせる場面を広げ、写真カードの使い方を理解させたい。
- ・ 手遊び歌遊びを始めると、たまごの絵のついたさいころを持ってきて「たまごのうた」をしてほしいと訴えることがあるなど、一緒に遊ぼうとする姿が少しずつ見られるようになってきた。また、他人を意識し始めたのか、友達のまねができるようになってきた。



意思伝達の場面や対象を広げることについて

- ・ 本児が情緒的に安定している帰りの場面で、あいさつの指導を行ったことによって視線を合わせて注意を喚起するとおじぎをするだけでなく、「さようなら。」と言えるようになってきた。また、登校時刻が早くなり、時間的、精神的にも余裕ができ、朝の場面でもあいさつができるようになってきた。

7 今後の課題

- 写真カードで気持ちを伝える場面を増やす。
- 写真カードを使う場面を増やしていき、使い方が十分理解できるようにする。
- 担任や友達と一緒に楽しめる活動を増やす。
- あいさつのできる場面を増やす。